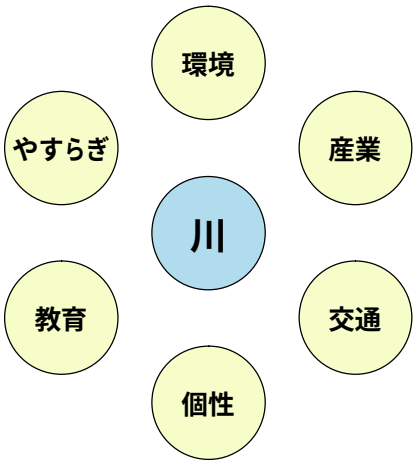
「情報」を用いた川と川沿いコミュニティーの発達

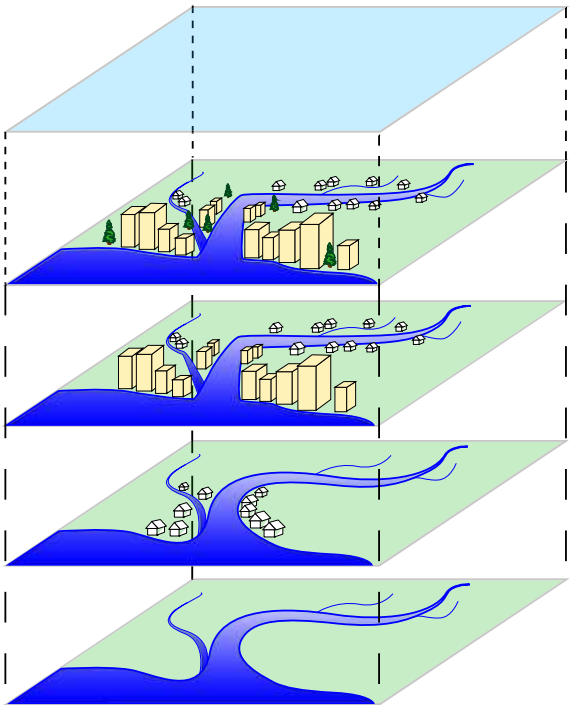
《はじめに》

古来より川は人々に様々な恩恵を与えてきた．周辺にはやがて“まち”が形成され，自然環境の宝庫，やすらぎの場，教育の場，地域の個性，交通手段，産業の場として利用されていった（右図）．特に日本には，地形的，気象的特徴から全国各地に水の豊かな川があり，人々の生活の支えとなっていた．



しかし，近代に入ると安全性と機能性だけを重視した治水事業が行われた．それにより，川はコンクリートを用いて直線化された．また，上流部には流量調整のために多数のダムが建設された．さらに，高度経済成長期を迎えると水資源および水質環境に対する問題が起こり，利水事業に重点が置かれるようになった．こうして川は本来の川らしさを失い，排水路のように社会から遠ざけられた．現在では，そういった川に対して「河川環境・景観の喪失」と批判も多い．そのため，川を元の姿に戻そうと，1981 年「環境」という概念が取り上げられた．良好な河川景観，水産資源の保護といった河川環境のために，親水性のある河川公園，多自然型河川づくりなどが謳われ，川に対して見直しが図られている．川は本来多様な利点を持つ生活空間であった．そして地域の人々が川に共有意識，信仰意識を持ち，地域の文化を築き上げる，地域文化想像の空間でもあった．「環境」に対して見直しがされてきた今，川をもっと生活に取り入れていくべきではないだろうか．

そこで今回，河川が持つ多様な可能性を追求した．これによって地域社会の再構築を目指す，川を通じた地域社会づくりの方法を提案する．対象として，北九州市の紫川を取り挙げた．紫川は山間部，郊外，小倉都心を貫流しながら様々に変化し，洞海湾に注ぐ都市河川である．現在，「環境」の導入から，様々な事業が展開されている川でもある．その紫川にハード面でなく，ソフト面でアプローチをかけ，地域に新しく「川を通じたつながり」を持たせることがねらいである．



《提案計画》

河川流域情報ネットワーク

古くは，情報は人と人との直接の接触から得るものであった．しかし，今日では，情報化社会，IT 産業などと騒がれ，インターネットを用いれば，自宅，オフィス，屋外でさえ様々な情報をいとも簡単に手に入れることができる．情報に関して大きな可能性を秘めている．また，川は水源から河口までの一連の流れに強いつながりを持つネットワークでもあり，これを利用しない手はない．そこで川と情報とを協調させ，コミュニティーの更なる結束，あるいは新たなコミュニティーの確立を目指す．また，川を取り入れたコミュニティーとなることで，自然に川に対する意識も向上する．河川を縦軸と見て，情報を横軸とし用いる．すると，川をまたいだ地域社会の面的な広がりが期待できると考える．

○電子掲示板

横軸となる情報として，電子掲示板を作成する．始めは，上流域用，中流域用，下流域用のように作る．それは住民だけでなく流域就業者なども利用でき，身近な情報交換の場として流域ごとで個性あるものに発達させていく．ときには別流域へとアクセスするのもいいだろう．そういったことから流域間でのつながりもつよくなり，やがて河川一帯の地域組につながる．

○防災情報の公開

日本の河川はその環境から，洪水の危険性が高い．しかし，河川改修工事は環境，生態系の破壊にもなってしまう．結果，ハード面のみならずソフト面での防災対策が必要となる．そこで，電子掲示板を国土交通省河川事務所の HP とリンクすることなどにより，人々に水害への意識が生まれ，河川情報ネットワークが洪水対策へとつながる．

ブースの設置

パソコンを持っていない，または，もってはいるがうまく活用できない，という家庭は数多くある．そこで，多くの人々が気軽に活用できる情報収集ブースを置くことを提案する．これがよりスムーズな地域つくりにつながる．また，ブースに訪れた人々には新たな出会いや触れ合いも生まれる．（以下，ブースを citysource と呼ぶ）

○設置場所

北九州市は公園が非常に多く，一人当たりの公園面積が 10.69m^2/人と政令指定都市の中でも神戸市についで第 2 位である．しかし，市内を歩き回ると，あまり利用されていないことが確認できた．そこで，河川そばの公園を，citysource の設置場所として提案する．これによって，公園自体の利用価値の向上が期待できる．初めは電子掲示板と同様，上流，中流，下流の 3 箇所に立地させ，ここをコミュニティーの拠点とする．その後は需要に応じて増設してもいいだろう．市街地に関しては，商業施設などの既存施設の一部を citysource の設置場所として活用させることにした．紫川の場合，「river walk」を用いるとよいだろう．都市河川では利便性，経済性，空間的要素などから，このような既存施設の利用が非常に有効な手段であるといえる．

サインの活用

citysource や，citysource が立地した公園の入り口などには川のシンボル的なサインを示してそれを

意識づける．それによりコミュニティーの人々は，ブースや川により親しみを持つ．また，今後のブース増設に対しても，サインによって場所がすぐに受け入れられるといった効果が期待できる．

ワークショップの開催

ワークショップを定期的に開催することも，コミュニティー確立の大切な手法のひとつである．そこでは住民たちの提案が反映され，河川計画に考慮されてくる．これは人々の河川に対する知識，意識変化，参加型社会の確立などを与え，また，自分たちの意見が生かされることによってさらに愛着が沸き，その後の自己管理へとつながる．開催の情報伝達に電子掲示板を用いるのもよいだろう．また，インターネットを活用することにより，自分たちが行っている活動などを citysource から全国に紹介することもでき，全国的に広がる可能性をも秘めている．そして自分たちの紫川，小倉に対してより誇りをもてるようになる．

イベント

小倉では毎年小倉祇園，わっしょい百万夏祭り，小倉城祭りなどが催され，賑わっている．そこに，今回提案した新たなコミュニティー同士で参加，競争などを行えば，面白いのではないだろうか．また，その様子を各 citysource 間において，情報ネットワークを使用したリアルタイム中継をすれば，さらに面白いかもしれない．このようなことを思いついた人がさっと掲示板に書き込んでおけば，それに対して様々な意見を求められ，より良いイベントを自分たちで容易に考えることができる．そして，実現させることによって，コミュニティーの更なる結束，拡張に繋がるのである．

《おわりに》

今回は川という基盤に，情報という横軸を加えることで地域社会がもっと元気になるような提案をした．そして，これは全国のまちで取り入れることができ，まちの個性を取り入れることで様々な方向へ変化させ，応用することができる．川に対する意識も変わり，新しいつながりが次々へと広がるとよい．更なる仕掛けをそれぞれのまちの人々に考えてもらい citysource を通じて発信してもらいたい．